

講評

第17回公共建築賞 北陸地区審査委員会 委員長

長岡造形大学建築・環境デザイン学科教授

山下 秀之



公共建築賞・
優秀賞

文化施設部門
(北陸地区)

金沢城公園 玉泉院丸庭園 玉泉庵

この作品は、庭園と建築の補完関係において絶賛される。建築の設計で、ひたすら庭園の「見え方、魅せ方」に苦心されたことは、庭園あつてのことであり、庭園なくして、建築単独の評価をすることは無意味であろう。よって、評価点は、庭園も含めたプロジェクトに対してなされるべきとした。加えて、全城郭事業のシーケンスにおいても、評価の範囲は、延長されるべきである。

ただし、審査員として、日本伝統庭園を、現代に蘇らせることに関しての必要十分な見識と、日本伝統建築の評価軸を持ち得てはいないので、審査のクライテリアを、その「コンセプトの出来」と「整備のプロセス」に向けた。

徹頭徹尾、「庭屋一如」であることを、現地審査で実感し、感銘を受けた。チームが、竣工まで、揺るぎのない目的と情熱を共有されたことも実感した。金沢城郭の整備に、とうとうここまで来た、という印象を受けた。37年前、学生だった時に目や耳に入ったのは、金沢大学の学生たちが闊歩していた姿や、クラブハウスでのロックバンドのサウンドだった。見違える風景に、石川

県はお宝を隠していた、という気持ちと、ならば、もっと早くから整備事業を始めればよかったのに、という気持ちが交錯した。明治から平成20年の発掘調査まで、時代に翻弄されたことが悔やまれる。唯一無二のプロセスにある復元整備事業には、新幹線開通、オリンピック、入園者の増減という観点によらず、ひたすらの推進を望むものである。



公共建築賞・
優秀賞

文化施設部門
(北陸地区)

聖籠町立図書館

写真のとおり素敵な建築である。

図書館の利用に関してユーザーのニーズが変化する中、近隣の家族が気楽に立ち寄り、情報収集や滞在する施設として明るく市民が主役のまちづくりの拠点として

のひとつの建築のありようを示していると評価できる。

建物全体の印象を決定付ける伸びやかな印象の「大屋根」は、町のシンボルにふさわしい特徴のある形状である。一方内部は、町の人々相互の、そして本との出会い

を目指したワンフロアの平面計画と、温かみのある素材感や町の資源をモチーフとして活用した空間は、シンボル性と親しみやすさの両面を実現している。

注目すべきは、随所にデザインのセンスが発揮されている点である。その頂点が、大屋根の構成とプロポーションにあることは明らかである。奥にせり上がる2枚の屋根面のねじれ傾斜角度と、棟でずらした高さ寸法が絶妙であり、加えて、妻面でうまく納めたデザイン（平面的に斜めカット）も秀逸である。連結柱が惜しいのだが、その大技の妻面をあえて裏側に向け、表側は、低くなっていく屋根面を、そのままスーッと伸ばしてアプローチにしている。心憎いデザインとセンスである。

以上のとおり、単体建築としての完成度は非常に高

い。設計担当者のセンスが発揮され、秀逸である。



公共建築賞・
優秀賞

行政施設部門
(北陸地区)

氷見市庁舎

前例のない事業である。氷見市の英断は見事としか言いようがない。市の一職員の「廃校となった高校の体育館を活用してはどうか」という提案から始まった。旧市庁舎の抱える問題（耐震性と津波の浸水）の解消は喫緊の課題で、財政など総合的に検討した結果、既存ストックである元県立高校の体育館2棟と校舎の一部を市役所にコンバージョン、という仰天プロジェクトである。

整備に当たって、「ファシリテーター」出身の元市長の方針により、新庁舎を単なる市役所ではなく、「フューチャーセンター」と位置付けたこともユニークである。ワークショップの開催などの市民との協働により市民の声を反映させることで、市民の主体性や自分たちの住むまちに対する誇りを高め、行政と住民が対話を行う文化が根付くきっかけとして事業の活用を図っているなど、先進的である。

平成26年の開庁以来、庁舎への視察者の積極的受け

入れや市民向けガイドツアーの実施により、多いときには月1,000人もの視察を受け入れるなど、行政関係者、議会関係者にも注目を浴びた事業であり、その企画内容および地域への貢献の取り組み等は、公共建築賞に十分に値する公共建築物である。



(受賞作品掲載は地区推薦順)